

域外における聖書の中国語訳
——馬士曼『聖經』の語彙的特徴について——

Bible translations into Chinese outside China:
About the distinctive vocabulary in Joshua Marshman's "Shengjing"

塩山正純

SHIOYAMA Masasumi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shioyama@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

At the same time as R. Morrison in China translated "Shentianshengshu" into Chinese, Marshman in India translated the bible into Chinese. Research already done states that both translations use the same text "Sishiyoubian". But is this view correct? In this paper, I want to make explicit the Chinese characteristics of "Shengjing" through an analysis of the commonalities and differences of "Shentianshengshu" and "Shengjing" by mainly examining the usage frequency of function word

1. Like "Shentianshengshu", "Shengjing" is completely written in literary style. It is also evident that both translations are almost identical.
2. Because only part of the four gospels of the translation's original "Sishiyoubian" is translated, the possibility is low that based on this, Chinese translations were made. But the unnatural Chinese of "Shentianshengshu" is rendered into natural Chinese in "Shengjing". I therefore think that material resources were provided by R. Morrison.
3. Concerning function word, mainly literary function word were used, but the usage of, e.g. "也" and "則" differs in the four gospels, and it is possible that the translation were based on different views of the language.
4. Concerning function word of spoken language, their number in "Shengjing" and "Shentianshengshu" is almost the same. But "Shentianshengshu" uses "了" with verbs being marked negatively, while Marshman has avoided "了".

1. マーシュマンと『聖經』の翻訳

1.1 マーシュマンについて

モリソンが中国で『神天聖書』を中国語訳したのとほぼ同時期に、インドのセランポールでも聖書の中国語に従事する人物がいた。その人物マーシュマン (Joshua Marshman) は、中国名が馬士曼, 1768年イギリスは Wiltshire の Westbury の織物職人の家に生まれた。家庭環境は貧しく、小学校卒業後すぐに書店に奉公したが、ほどなくして生家にもどり父親のもとで家業の織物の仕事に従事した。また、マーシュマンは生来の能力と勤勉によって、18歳までに5千冊を超える書物を読んだといわれる。

1794年からはイギリスの Bristol のバプテスト学校の教師をつとめたが、William Carley に影響を受け、インド行きを決意した。1799年にアメリカ船にてインドに向かい、同年カルカッタに到着後、セランポールに向かった。当地で布教活動の傍ら、学校を設立し、聖書の翻訳に従事し、初期は幾つかのインド諸言語への翻訳を行った。Fort William College の Brown 牧師の勧めによって、聖書の中国語訳に取りかかることになり、1805年にラサールのもとで中国語の学習を開始し、1811年には新約部分を訳了し出版した^①。

1.2 『聖經』の翻訳

モリソンが聖書の翻訳を開始したのは、彼がプロテスタント初の来華宣教師として広州に到着した1807年以降のことであり、この時点で、マーシュマンは聖書の新約部分の中国語への翻訳を開始して数年を経過しており、すでにそのなかばを翻訳していた^②。

マーシュマンによる『聖經』の全訳は、1823年にイギリス外国聖書協会の総会に提出された。一方で、モリソンによる『神天聖書』は、その翌年の1824年に同総会に提出されたので、公式にはマーシュマンの『聖經』のほうが、モリソンの『神天聖書』よりも1年早く、中国語による全訳を公のものにしたことになる。

『神天聖書』と『聖經』の両者には、一見しただけでも、翻訳が酷似した箇所が数多くあることがわかるが、当時のイギリス国内では、モリソンのほうが名声で勝っていたために、当初から、中国語訳聖書については、モリソンの中国語訳をマーシュマンが踏襲したという説が有力であった^③。

このモリソン先行説は、モリソンの協力者であるミルン (中国名: 米憐) が Bogue に宛てた書簡の内容に依る。Bogue は、1818年にモリソンに宛てた書簡で、「ミルンはマーシュマンの訳本については、明らかにモリソンの訳本から写したという見解である」と述べている。また「彼ら (マーシュマン) の印刷された訳本には、あなた (モリソン) の訳本における誤字があったり、あなたの訳本の刻字職人が誤ったところを消去したりしている」とも述べている。

しかし、訳了した聖書の出版に関しては、モリソンはマーシュマンから遅れること2年、1813年ようやく新約部分の中国語訳を出版し、聖書全文の中国語訳でも、マーシュマンよりも1年遅れている。新約聖書の中の各書の翻訳をみても、概してマーシュマンのほうが出版年が早く、出版時期だけから判断するとすれば、マーシュマンがモリソンを踏襲したとするのは難しいかも知れない。

しかし、Samuel Kiddは、「ヨハネの福音書」13章26節の訳語を例に、「もし2人の翻訳者がお互いに独立して翻訳を行ったのであれば、かくも多く一致する箇所があるのはおかしい」と述べている^④。同節の本文は『四史攷編』、『神天聖書』、『聖經』の順に以下のとおりである。

【四】 耶穌答曰余所將給點餅者即是也儒達問曰主是我乎耶穌曰爾已言矣隨點餅給之

【神】 耶穌答曰我將給此些餅沾濕之之時就是其人且沾濕些餅之時給之與西們之子如大士以色加掠

【聖】 耶穌答曰我將給此些餅沾濕之後便是其人且沾濕些餅之後給之與西們之子如大士以色加掠

そして、George Stauntonは、マーシュマンに中国滞在の経験が無いことから、彼の中国語の能力に疑問符をつけている。また、モリソン自身も、マーシュマンに中国語を教えたラサールの中国語能力を疑っていたことから、『聖經』の中国語のレベルに疑問符を抱いていた。このように、モリソン訳をマーシュマンが踏襲した、とする説が大勢である。

しかし、マーシュマンはThe Works of Confuciusで、孔子の著作の翻訳を行ったり、中国語の文法書CLavis Sinicaを出版するなど、中国語能力には、問題はなかったとする説もある^⑤。そして、聖書の外国語訳という面から見ても、マーシュマンは中国語訳以前にも、インド諸言語への翻訳を経験しており、中国語訳に際しても、一語の翻訳に長時間かける真摯な態度を貫いた。

本稿では、2人の宣教師の間でのやりとりについてはひとまず置いて、第2節で『神天聖書』と『聖經』の書面に現れた中国語の語彙と文体の分析を通して、『聖經』の語彙と文体の特徴と、『神天聖書』との共通点、相違点について考察したい。

2. 『聖經』4福音書部分の文体と語彙的特徴

— 『神天聖書』同一節との比較対照を通して—

『聖經』と『神天聖書』の中国語が非常に似通っていることに関して、譚樹林2004などの一連の先行研究は、「マーシュマンが先行するモリソンの中国語訳を参照した」という一般的な見解に対して、両者が『四史攷編』という同一の底本を使って翻訳を行ったことの必然的な結果であると、述べている。果たして、事実はどうであるのか、本稿では、虚詞

の用例の頻度をもとに文体の特徴をみながら、『四史攸編』、『神天聖書』と比較対照しつつ、『聖經』の語彙的特徴を考察したい。

2. 1 虚詞の用例について

前節の翻訳までの経過で指摘したように、『聖經』4福音書の文体は一見したところ、モリソン訳の『神天聖書』と中国語の表現が非常に似通っており、訳文も一致する割合が高い。また、若干の白話語彙も混在するものの、総じて、かなり文語的な印象がつよい。本節でも、ヤホントフ1969の文言から白話の虚字26語を中心として、文言、混淆体、白話(口語)的な性格の虚詞について、それぞれ用例数を調査し、虚詞の特徴から文体の度合いを識別し、その語彙の特徴について見ていきたい^⑥。まずは、最も文言的であるA組の鑑定語から順に見ていきたい。

なお、用例については『四史攸編』、『神天聖書』の同一章節と対照し、各語彙の用例で必要と思われるものについては、適宜、ギリシア語原典対訳の英語訳を付した^⑦。

2. 2 文言虚詞について (1) 上古漢語を中心に

中国語の書面語の最も古い形を残しているA組(上古漢語)の虚詞“其、之(代)、以(介)、於/于、也、者、所、矣、則”の用例数について、巻1の「マタイの福音書」以下の4福音書を調査した結果は下表の通りであった。“其”と“之”、“以”については、用例数を省略した。以下、関連する語彙の用例について、『神天聖書』の同一節と比較対章しながら順に見ていきたい。

	于, 於	也	者	所	矣	則
Matthew	95-124	506	428	118	89	136
Mark	49-45	146	229	79	62	30
Luke	33-209	82	404	174	87	44
John	140-49	214	323	168	75	95

1) “其”は主格、属格の3人称代名詞、および指示代名詞の役割である。

1) M1-21

【神】又其將生一子爾必名之耶穌因其將救厥民出伊等之罪也

【聖】其將産一子汝名之耶穌因其將救厥民出伊等之諸罪也

2) Ma4-9

【神】其謂伊等曰有耳能聽者宜聽也

【聖】其謂伊等曰有耳能聽者宜聽也

3) L1-31

【神】夫爾孕胎及生子稱其名耶穌

【聖】夫爾將孕胎 生子宜稱其名耶穌

4) J19-33

【神】到耶穌之時見其業已死了且不打折厥小腿

【聖】到耶穌之時見其已經死矣故弗折打厥小腿

2) “之”は目的格の3人称代名詞，および指示代名詞の役割としての用法である。下表のとおり，用例は『神天聖書』とほぼ同じである。

文末3人称 之	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	61	58	119	50	288
聖經	73	59	115	58	305

文末3人称 他	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	3	2	0	3	8
聖經	0	2	0	3	5

1) M4-20

【神】伊等即離網而從之

【聖】伊等即棄網而從之

2) Ma5-18

【神】其既上船昔懷鬼風者求之准隨之

【聖】其既上船昔懷鬼風者求之准隨之

3) L5-28

【神】即棄眾起身而隨之

【聖】其即棄所有起身而隨之

4) J12-18

【神】因聞其行斯神跡故眾出迎之

【聖】伊等因聞其行斯神跡#故出迎之

3) “其”とともに，3人称代名詞と指示代名詞の属格を表わす“厥”は，用例数がほぼ同じである。

厥	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	196	110	105	126	537
聖經	191	111	115	130	547

1) M8-23

【神】其既上船厥門徒隨之

【聖】其既上船厥徒隨之

2) M8-25

【神】故厥門徒就之曰主救我們我們沉淪【聖】厥徒就之曰主救我們我們淪沒

3) L6-20

【神】耶穌目視厥門徒曰爾貧者為福矣蓋神之國屬爾【聖】耶穌舉目視厥徒曰爾貧者為福矣蓋神國將屬爾也

4) J7-5

【神】蓋厥弟兄們亦弗信于之【聖】蓋厥弟兄們也弗信于之

4) また“他”の字は、「マタイの福音書」で3人称の用例だけでは12例あった。他の福音書についても下表のとおりで『神天聖書』より少なくなっている。このほか「マルコの福音書」に“他們”が1例あった。

他	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	31	28	2	55	116
聖經	12	17	6	42	77

1) M 8-7

【神】耶穌謂之曰我則去醫他【聖】耶穌曰吾便往療之

2) Ma14-6

【神】惟耶穌曰由他爾為何勞他及我行善功【聖】惟耶穌曰由他爾為何勞他為我行善功

3) L19-25

【神】伊等曰主他有十塊【聖】伊等曰主他有十塊

4) J9-26

【神】伊等又言之曰他與爾何行他如何開爾目【聖】伊等又問之曰他與汝何行他如何開汝目

また、『神天聖書』にあった英語の関係代名詞を思わせるような“他”2例は、『聖經』では、それぞれ以下のように改められている。

1) M10-28

【神】又勿怕伊等殺身而無能殺靈者寧怕他能使連身靈沉淪於地獄者也【聖】又勿驚彼殺身而無能殺魂者寧畏彼能使身連魂沉淪於地獄者也

M10-28) Do not fear those who kill the body but cannot kill the soul; rather fear him who can destroy both soul and body in hell!

2) M25-28

【神】且取去其之一個大林大而給之與他有十個大林大__

【聖】且取去其之一箇大林大而給之與__有十__大林大者

25-28) So take the talent from him, and give it to the one with the ten talents.

このほかの3人称では、“渠”は用例がなかった。吏文で多用される“伊”やその複数語尾のついた“伊等”の用例が多数あるが、これについては、稿を改めて考察したい。

3) “于”と“於”のほとんどは動詞に後置されて「動詞+“于，於”+場所」の形をとり、目的語がある場合はこれを動詞との間に置いて、動作の行われる場所や時間，方向，出発点，対象，原因，理由などを表す。

書章節	神天聖書	聖經
M13-1	當日耶穌出家 <u>坐于</u> 海邊	是日耶穌自屋去 <u>坐于</u> 海邊
Ma6-29	厥門徒聞此之時即來而取起厥尸 <u>葬之于</u> 墓矣	厥門徒既聞此即來取起厥尸而 <u>葬之于</u> 墓矣
L1-74	以賜我得救 <u>于</u> 我仇之手	以賜我得救出仇手
J8-8	而再曲身 <u>寫于</u> 地面	而再曲身 <u>寫于</u> 地面

「來，去，往”+“于，於”+場所」となり，目的地を表すものは，“來于（於）”については，下表の如く用例が増えている。

(1) “來于（於）” 17例

來于（於）	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	3	1	2	0	6
聖經	4	4	7	2	17

用例の3), 4) は『神天聖書』から言い換えられた用例である。

1) M3-1

【神】於當數日若翰施洗者來于如氏亞之野

【聖】於是日間若翰施蘸者來於如氏亞之野

2) Ma6-31

【神】其謂伊等曰爾等自避來于野處歇些時蓋有眾多往來致伊等勿得空可吃

【聖】其謂伊等曰爾等自避來于野處歇些時蓋有眾多往來致伊等無得空可喫

3) L16-28

【神】蓋有五箇兄弟而欲拉撒路往勸之恐伊亦來于此受苦之處

【聖】蓋我有五兄弟欲其去勸之免伊亦來此受苦之處

4) M22-4

【神】…達知被請者云卻我已準備我餐也我牛我肥家畜皆已■諸事已便來於婚也

【聖】…達知見請者曰夫我已備筵席矣吾牛與肥畜皆已宰諸事齊備請來赴婚也

(2) “去于(於)”は用例が無くなった。『神天聖書』で用例のあった3例では、1例が全く同じで、2例が“往於”に言い換えられているが、章節の表現はほぼ同じである。

1) M25-46

【神】此等將去于永刑惟義者于常生也

【聖】此等將去于永刑惟義者于常生也

2) M10-5

【神】此十二位耶穌遣出外而令伊等曰勿去於異民之路又勿進於撒馬利亞之何邑

【聖】此十二位耶穌遣出外而命伊等曰勿往於異民之路勿進於撒馬利亞之何邑

3) M10-6

【神】乃寧去於以色耳以勒家之失羊也

【聖】乃寧往於以色耳勒家之失羊也

(3) “往于(於)” 12例。

往于(於)	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	2	4	3	2	11
聖經	4	4	1	3	12

『神天聖書』で“往于(於)”のある章節は、ほとんどが全く同じ表現である。

1) M27-53

【神】而出墓又復活之後往於聖邑現與多人也

【聖】而出墓又復活之後往於聖邑現與多人也

2) Ma1-38

【神】其謂伊等曰我們宜往于近之各邑以宣教蓋緣此我出來

【聖】其謂伊等曰吾等宜往于近之各邑以宣教蓋因此我出來

3) L22-39

【神】時耶穌出而照常往于阿利瓦山厥門徒隨之

【聖】耶穌出而如常往于阿利瓦山厥門徒隨之

4) J7-8

【神】爾往斯禮宴去我不曾往於此禮宴蓋我時未曾滿至

【聖】爾往此禮宴去我不曾往於此禮宴蓋我時未曾滿至

(4) “進于(於)” 7例。

進于(於)	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	4	2	4	0	10
聖經	4	2	1	0	7

1) M25-10

【神】伊等去买時新郎來而伊使者進于婚而閉門

【聖】伊等去买時新郎到而伊使者進于婚而閉門

2) M10-5

【神】此十二位耶穌遣出外而令伊等曰勿去於異民之路又勿進於撒馬利亞之何邑

【聖】此十二位耶穌遣出外而命伊等曰勿往於異民之路勿進於撒馬利亞之何邑

3) Ma10-24

【神】門徒奇其言惟耶穌再答謂伊等曰小兒輩伊等賴財者甚難進于神之國

【聖】門徒奇其言惟耶穌再答謂伊等曰小兒輩伊等賴財者甚難進于神之國

4) L19-45

【神】耶穌隨進于堂而逐出去彼在內行買賣

【聖】耶穌隨進堂而驅出在彼中作買賣者

“於”と“于”の幾つかは、さらに文言で比較を表わす「形容詞＋“於(于)”」の形で、介詞“比”を使用する現代語の“比～更…”や“比～尤…”と併用されている。

太田 1964 には、論語では「述語が形容詞のばあい、賓語のまえに「於」「乎」を用い、比較するものをあらわし、孟子では「述語が形容詞のばあい「於」などを用いて比較する対照をあらわす」とある^⑧。さらに、太田 1958 では、比較句の相対的差比を表すもので“於”を用いるものは、古代より唐五代頃まで用いられたらしい、古代語式の表現であるという^⑨。

(1) 形容詞＋“於(于)”

比較の表現で“于”を用いた例は無く、すべて“於”が使われていた。

形容詞＋於	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	15	4	2	9	30
聖經	11	4	3	8	26

『聖經』では、“大於”が全体で 21 例であった。このうち 18 例は『神天聖書』と同一章節で同じように使われたものである。

1) M11-11

【神】…以凡由女得生向無起大於若輸付洗者也惟天王中之至小大於彼也

【聖】…以凡受生由女者向無起大於若輸付蘊者也惟天國中之至小者大於他也

2) Ma1-7

【神】其宣曰我之後有大於我來者我不堪以俯伏解厥鞋之帶也

【聖】其宣曰我之後有大於我者來我弗堪以俯伏解厥屨之帶也

3) J13-16

【神】我確確語爾僕者並非大於主又被遣者大於遣之者也

【聖】我確確語汝僕者非大於主被遣者非大於遣之者也

『神天聖書』の“大於”うち6例は、『聖經』で別の表現に言い換えられたが、以下の4章節の用例からは、『神天聖書』の“大於”が、『聖經』では割合細かく言い換えられていることが分かる。また用例5)のように、逆に“大於”に改められた章節もある。

1) M3-11

【神】…惟後我而來之耶穌大於我厥鞋我不堪帶之其將于聖神風並火…

【聖】…第後我而來者能於我厥鞋皮帶我不堪解之其將於聖風及於火…

2) M6-25

【神】…並勿為身何可穿生命豈非大於糧並身大於衣乎

【聖】…並勿為身何得穿命豈非貴於糧並身貴於衣乎

3) M10-24

【神】門徒非大於師並僕非大於主也

【聖】門徒不在師之上僕不在主之上

4) L12-7

【神】又到爾頭之髮都已數且勿懼爾直大於多雀

【聖】至爾首之髮皆已數且勿懼爾乃大過多雀

5) L12-24

【神】想其烏鴉伊種割受皆無伊藏所倉房皆無惟神養之爾豈非更貴於鴉

【聖】想彼烏鴉伊無稼無穡無藏所無倉房惟神養之爾豈非更大於鴉乎

このほかに、『神天聖書』で“大於”だったものが『聖經』の同一章節で“比～更大…”と改められたものや、また逆に、“比～更大…”が“大於”に改められたものもあり、比較を表す2つの表現、「形容詞+“於(于)”」と、介詞“比”を使用する“比～更…”が、同じ意味を表すことが理解されていたことが分かる。

1) J5-36

【神】惟我有証大於若翰的者蓋父所施我成之功…

【聖】惟我有証比若翰更大者蓋父所施我成之功…

2) L11-31

【神】…蓋其自地末界來聽所羅們之才智而比所羅們更大在此

【聖】蓋其自地之末界來聽所羅們之才智而有大於所羅們者在此

3) L11-32

【神】…蓋彼因若拿傳勸悔而比若拿更大在此

【聖】…蓋伊悔因若拿之傳教而有大於若拿在此

このほか、「マタイの福音書」には“貴於”が5例，“美於”が1例あったが、先に用例として挙げた「M6-25」以外のものは以下のとおりである。

1) M5-47

【神】又爾若止施禮與弟兄們爾何如美於別人哉異民豈非如此

【聖】又若爾止禮爾弟兄們爾如何美於他人哉徵餉者豈非如是乎

2) M6-26

【神】…伊不播種並不收穫不放手倉惟爾天上之父養伊等爾豈非貴於伊等

【聖】瞻彼天空之鳥不稼不穡不收于倉惟爾父在天者養伊等爾豈非多貴於伊乎

3) M10-31

【神】故勿懼爾貴於麻雀多也

【聖】故勿驚爾貴於麻雀多矣

M12-12

【神】且一人豈不貴於羊乎故此於撒百#日行好則合法也

【聖】且人豈非貴於羊乎因此於撒百#日行好為合例也

(2) “比”を使用するもの

介詞“比”で比較を表すものの用例数は以下の通りである。

比～更…/比～尤…	Matthew		Mark		Luke		John		全体	
神天聖書	7	1	3	0	9	0	1	2	20	3
聖經	8	1	3	0	7	1	4	0	22	2

比較の表現で“比”を介詞として使用するものは、近代以降に見られる新しい用法で、太田1958によると、さらに“比”による比較句に副詞・助形詞・補語を用い、差比をさらに細かに表現することは、白話の特徴である¹⁰⁾。『聖經』では“比～更…”が最も多く22例で、“比～尤…”が2例であった。“比～更…”と“比～尤…”，“比～越…”の用例は以下のとおりである。以下の用例からも、比較の表現については、さきの文言「形容詞+“於(于)”」と介詞“比”の表現が併用されていることが分かる。

1) M19-24

【神】我又語爾知以駝進通針之眼比富人進神之國更易也

【聖】又我告爾知以一隻駱駝入通針眼比富人進神之國更易也

2) Ma10-25

【神】一隻駝入通針之眼比富人進神之國更容易

【聖】一隻駝入通針之眼比富人進神之國更易也

3) L18-25

【神】比一富人進神國駱駝透針眼更易

【聖】蓋一富人進神國比駱駝穿針眼更易

4) J5-20

【神】蓋父愛其子而指之以自己凡所行作又其將指之以比斯尤大功致爾可奇

【聖】蓋父愛其子而示之以自己凡所行作又其將示之以比此更大功致爾可奇

5) L16-17

【神】天地消去比例之一點見廢更易矣

【聖】天地消去比律之一點廢去尤易矣

6) L10-14

【神】故於審判時比爾地耳及西頓勢更堪耳

【聖】故於審判時比爾地耳與西頓之勢越堪耳

この他の用例は以下のとおりで、『神天聖書』にあった“跑得快”の用例は、全く同じ表現であった。

1) J20-4 【聖】伊兩人皆跑惟那別門徒比彼多羅跑得快而先到墳

5) 文末助詞の“也”について

也	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	592	139	54	205	990
聖經	506	146	82	214	948

用例数は上表のとおりで、『聖經』でも「マタイの福音書」での用例数が極端に多く、地の文にも、白の部分にも多用されている。一方で、本文の総字数が最も多い「ルカの福音書」では82例しかなかった。以下、『神天聖書』で“也”のある章節を見てみると、若干の異同はあるものの、ほぼ同じであることが分かる。

書章節	神天聖書	聖經
M3-6	又謝認自己之罪受他施洗于若耳但河也	又謝認己罪而受其施蘸於若耳但河矣
M4-19	其謂伊等曰從我而我將使爾漁人也	其為伊等曰從我而我將使爾漁人也
Ma10-12	又若婦休厥夫而另娶一個則行姦也	又若婦休厥夫而另嫁別個則行姦也
Ma13-37	又我所語爾亦以之我語眾即醒守也	又我所語爾亦以之我語眾即醒守也
L2-47	凡聞之者奇其聰明而所答者也	凡聞之者奇其靈敏而所對者也
L7-50	其謂女曰爾之信教爾矣爾且安去也	耶穌謂女曰汝信教汝矣平安而去
J1-9	彼為真光照凡來世之人也	彼為真光照凡入世之人者也
J19-30	耶穌接醋後曰已畢了即俯首而給靈魂去也	耶穌接醋後曰已畢矣即俯首而給靈魂去焉

6) “者”について

『神天聖書』よりも4福音書すべてで用例が増え、極めて多く用いられている。

者	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	372	171	327	275	1145
聖經	428	229	404	323	1384

太田1964によると、名詞性連語のうち助詞“者”を末尾に有し全体で1個の名詞に相当する連語を「者」字連語という。論語、孟子での文言の用例の分類に依ってみると、「マタイの福音書」に限っていても、いずれの用法も充足していることが分かった。

(1) “者”が形容詞につく (M13-52)

【神】時其謂伊等曰故各書士教為天國者乃似人為家主取出其藏以舊者以新者也

【聖】隨其謂伊等曰故各書士教為天國者乃似人為家主取出其藏新與舊者也

(2) 動詞につく (M14-21)

【神】夫食者大約五千人除婦兒女之外也

【聖】夫食者約五千人另外婦人孩子

(3) 動賓連語につく (M2-20)

【神】起也取嬰兒同厥母往去以色耳以勒之地蓋尋殺嬰兒者已死

【聖】起身取嬰兒偕厥母往以色耳勒之地蓋尋害嬰兒之命者已死矣

(4) 主述連語につく (M5-3)

【神】心貧者為福矣蓋天國屬伊等

【聖】心貧者為福矣蓋天國屬伊等也

(5) 複数の述詞をもつ複雑なものにつく (M10-2)

【神】我固以水施洗爾致悔罪惟後我而來之耶穌大於我…穌

【聖】我以水施蘸爾致悔罪第後我而來者能於我…

(6) 名詞、固有名詞につく (M1-16)

【神】…第一西們名彼多羅者同安得路厥昆又洗比氏之子者米士同若翰厥昆也

【聖】…第一西們名彼多羅者同安得路厥昆又洗比氏之子牙可百同若翰厥昆也

7) “所”について。

所	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	115	81	181	169	546
聖經	118	79	174	168	539

用例数はいずれの福音書も『神天聖書』とほぼ同数であった。名詞性連語のうち“所”によって連語を構成する「所」字連語(“～所…”)については、「話す、告げる」に使われているものが“～所言”24例, “～所語”12例, “～所説”1例 “～所告”2例で合計39例であった。“～所在”も比較的多く20例あった。『神天聖書』で“所”が使われている主な用例は、『聖經』では、言い換えられたものも含めて、以下のとおりである。

書章節	神天聖書	聖經
M28-6	…乃已復活依其所言爾來見主被放在之所	…乃已復活依其所語爾來看主被放在之所
Ma13-37	又我所語爾亦以之我語眾即醒守也	又我所語爾亦以之我語眾即醒守也
M10-27	我于暗而所告汝爾于光宣之…	吾于暗告爾者爾于光宣之…
L2-50	惟伊不明其所説之之言	但伊不達其所語之之言
L12-34	蓋爾財所在之處彼爾心同在焉	蓋爾財所在處彼爾心同在焉

8) 文末助詞の“矣”

矣	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	70	59	73	76	278
聖經	89	62	87	75	313

用例数は上表のとおりで、各福音書でおおよそ同じように用いられており、用例は以下のとおりである。

書章節	神天聖書	聖經
M9-26	夫此事之名聲揚於彼之諸方矣	夫此事之名聲播於彼之諸方矣
Ma13-17	惟伊等孕者乳子者當時有禍矣	惟伊等孕者乳子者當時有禍矣
L18-21	對曰此皆我自幼時而來守矣	對曰凡此我自幼至今守矣
J4-24	神為靈則崇拜之者必以靈以誠而拜之矣	神為靈則崇拜之者須以靈以誠而拜之矣
J18-32	…耶穌所講及其以何様而受死之語得驗矣	如是耶穌所講及其以何様而受死之言得驗矣

9) 承接の連詞“則”

承接を表わす連詞の“則”の用例数は下表のとおりで、305例であった。

則	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	161	32	18	90	301
聖經	136	30	44	95	305

また、『神天聖書』では“便”が16例，“就”が33例あり、『聖經』では“便”が18例，“就”が9例で、白話で承接を表わす“便”や“就”も若干数つかわれているが、やはり“則”が圧倒的に多い。『神天聖書』で“則”が使われている主な用例は、『聖經』では言い換えも含めて以下のようになっており、用例数は殆ど同じでも、使われている章節が異なっている。

書章節	神天聖書	聖經
M20-24	其十位聞此則滿恨兩弟兄們	其十位聞此即滿恨兩弟兄們
Ma11-6	故伊等依耶穌令而答則放他們去	伊等乃依耶穌所命而答伊等得放行
L1-29	見之則驚為其言並想其請安如何	見之即驚及厥言並想當何請安
M6-23	惟若眼不好則渾身暗黑 故若在爾之光為暗則暗大矣	惟若目有患則全體暗黑 故若在爾之光為黑其黑大矣
J14-15	爾等若愛我則守我誠	汝曹若愛我則守我誠

2.3 文言虚詞について (2) B組の中古漢語を中心に

『聖經』4福音書全文での、中古漢語の特徴をもつ虚詞の用例数の一覧は下表のとおりである。

	而	之	何	無	此	乃
Matthew	437	省略	139	78	167	78
Mark	321		109	83	92	60
Luke	312		121	78	142	80
John	340		135	93	144	154

1) “而”によって動詞または動詞連語を並列するもの

而	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	455	333	304	344	1436
聖經	437	321	312	340	1410

形容詞や動詞、動詞を含む連語を並列する場合、順接、逆接など、“而”は様々に用いられ、その用例数もきわめて多い。

1) M8-15

【神】既摩厥手瘡病即退致其起身而服事伊等

【聖】既摩其手熱病立退即起身而服事伊等

2) Ma6-53

【神】既過海伊等到厄尼撒勒之地而就岸下船

【聖】既過海伊等到厄尼撒勒之地而就岸下船

3) L18-9

【神】又對或思自為善而輕忽他人者其言此喻

【聖】又對或思自為義而輕視他人者其設此喻

4) J20-6

【神】遂西們彼多羅到而進墳去見麻布放在

【聖】後西們彼多羅到而進墳去見麻布放在

2) 連体修飾の助詞としての“之”

“之”は連体修飾の助詞としての用例で、連体修飾を表わすのは全文を通して、ほとんどが“之”である。“的”は87例で白話語彙のなかでは量詞の“個（箇）”に次いで多いものの、“之”の約20分の1である。

書章節	神天聖書	聖經
M14-1	時四方督希羅得聞耶穌之名聲	當時四方督希羅得聞耶穌之名聲
Ma10-43	惟爾之中必不要如此… …乃凡欲為大必為爾之役	惟爾之中必不要如此… …乃凡欲為大必為爾之役
L22-7	夫無酵麵之日… …即巴所瓦應祭之日已到	夫無酵麵頭之日… …即巴所瓦#應祭之日子已至
J4-5	且其到撒馬利亞之邑名數革耳… …近牙可百所給厥子若色弗之塊地	且其到撒馬利亞之邑名數革耳近… …牙可百所給厥子若色弗之塊地

3) 疑問代名詞の“何”

“何”の用例数と用例は以下のとおりである。

何	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	104	70	92	108	374
聖經	139	109	121	135	504

1) M6-31

【神】故勿罣慮云我將何吃將何飲我將以何得穿

【聖】故勿懸念云我何以得食何以得飲何以得穿

2) Ma6-5

【神】且在彼除按手數病者上醫之之外其不得行何異跡

【聖】且在彼除按手數病者上愈之之外其不得行何異跡

3) L22-49

【神】同耶穌者見將有何事謂之曰主我儕可以刀打否

【聖】同耶穌者見將有何事謂之曰主吾曹可用刀擊否

4) J7-35

【神】故如大輩相云他往何處致我不能遇著#之他往于散異民中者而教訓異民乎

【聖】故如大輩相云其往何處致我不能遇之其往于散異民中而訓異民乎

“何”はこの他に，“如何”が67例（『神天聖書』は75例），“因何”が26例（同55例），“為何”が20例（同21例）あった。“甚麼”は4福音書に用例がなく、『四史攸編』までに用例があった“曷”は用例がなかった。

4) 否定を表す“無”

無	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	78	73	85	84	320
聖經	78	83	78	93	332

用例は以下のとおりである。とくに、用例1)と2)は同じ場面を描写したものである。ふつう聖書で同じ場面を書くときは同一の表現を使い、原典でもそうになっているが、『神天聖書』と『聖經』では、“無”は同じように使われているが、各々異なるところがある。用例1) M8-20と2) L9-58はいずれも以下のとおりであった。

1)と2) 原典英訳

And Jesus said to him, “Foxes have holes, and birds of the air have nests; but the Son of Man has nowhere to lay his head.”

1) M8-20

【神】 耶穌謂之曰狐狸有穴天空之鳥有巢惟人之子無安首之所矣

【聖】 耶穌謂之曰狐狸有穴天空之鳥有巢惟人之子無置首之所矣

2) L9-58

【神】 耶穌謂之曰狐有穴空鳥有窩惟人之子無安首之所

【聖】 耶穌謂之曰狐有穴空中之鳥有巢惟人之子無置首之處

3) Ma6-8（下線は原書では第9節）

【神】 又其令伊等除棍外勿帶何為路費也無袋無餅無銀在荷包裡#

【聖】 又命伊等勿帶何為路費無袋無餅無銀在荷囊裡惟棍而已

4) J15-5

【神】 我乃葡萄樹爾為枝居于我我居于之者則多結實蓋爾無我則無所能行

【聖】 我乃葡萄樹汝乃枝居于我者我居于之居于我者多結實蓋汝無我則無所能行

5) 近称の指示詞の“此”

“此”の用例数は下表のとおりである。

此	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	168	95	188	141	592
聖經	167	92	142	144	545

近称を表す指示詞はほぼ全てが“此”で，“這”は2例のみであった。用例は以下のとお

りである。4) の用例の原典英訳は “and as he watched Jesus walk by, he exclaimed, ‘Look, here is the Lamb of God!’” であり、『神天聖書』は “here is” に、『聖經』は “Look” に重点をおいて翻訳したと思われる。5) は “這” の用例である。

1) M12-23

【神】 眾民奇曰此豈非大五得之子乎

【聖】 眾民奇曰此豈非大五得之子乎

2) Ma6-15

【神】 又別的曰此乃以來者又曰此乃先知也或云似昔先知輩之一

【聖】 又別的曰此乃以來者又曰此乃預知 # 也或云似預知輩之一

3) L18-9

【神】 又對或思自為善而輕忽他人者其言此喻

【聖】 又對或思自為義而輕視他人者其設此喻

4) J1-36

【神】 若翰視耶穌遊時曰此乃神之羔者

【聖】 若翰見耶穌遊時曰觀神之羔與

5) M21-31

【神】 此兩個那一個行厥父之意也伊等答之曰…

【聖】 這兩個那一個行厥父之意也伊等答之曰…

6) 副詞の“乃”

乃	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	84	58	61	162	365
聖經	78	60	80	154	372

用例のほとんどは副詞「～はすなわち…である」の意味で用いられている。

1) L11-34

【神】 身之燈乃目且爾目既無疾即全身得光惟或爾目有疾即全身在暗

【聖】 身之燈乃目故爾目無疾時則渾身見光惟若爾目有疾則渾身見暗

2) J9-28

【神】 時伊等罵之曰爾為厥門徒我乃摩西之門徒

【聖】 時伊等罵之曰汝為厥門徒吾乃摩西之門徒

その他は、副詞「そこで～、はじめて～、やつと～」の意味で用いられている。

3) M1-19

【神】 且厥夫若色弗因為義人不願表其事與眾乃想私休之

【聖】 且厥夫若色弗因是義人不欲揚其事於眾乃想私休之

4) Ma1-25

【神】且耶穌責之曰爾勿講乃從之出來

【聖】耶穌責之曰爾勿講乃從之出來

2. 4 文言の文末助詞について

これまでに見たもの以外で、文言の特徴をもつ文末（句末）助詞の用例数については、下表の通りである。

	Matthew	Mark	Luke	John	聖經4福音書	神天聖書	四史攸編
乎	80	65	46	83	274	254	178
哉	16	2	14	0	32	28	15
耶	5	0	8	8	21	23	12
與	0	0	0	3	3	1	0
歟	0	0	0	0	0	6	1
耳	0	0	12	2	14	5	6
然	1	0	9	8	18	17	1
焉	30	12	19	37	98	71	102
合計					460	405	315

さきに挙げた“也”948例，“矣”313例はもとより，“乎”，“焉”をはじめとして、文言の文末助詞の使用頻度が高くなっている。この表のほか，“夫”や“已”“而已”については用例がなかった。各々、用例については特に挙げなかった。

2. 5 白話虚詞について

『神天聖書』4福音書全文で、白話作品の特徴であるC組の語彙についての用例数は下表のとおりである。この表で言う“兒”と“子”は接尾辞としての用法である。

	便	得	個-箇	了	裏,裡	這	底,的	着	只	兒	子
四史攸編	2	0	0-0	1	3	0	1	1	0	0	0
神天聖書	16	41	99-11	36	15	(1)	110	8	2	0	25
聖經	18	44	79-23	8	7	2	87	12	0	0	16
(Matthew)	2	18	32-21	3	2	1	42	1	0	0	6
(Mark)	1	7	27-0	3	2	0	17	3	0	0	3
(Luke)	13	14	9-2	1	1	1	8	6	0	0	1
(John)	2	5	11-0	1	2	0	20	2	0	0	6

白話の特徴をもつ虚詞で表に挙げた語彙の合計は、『四史攸編』が8例、『神天聖書』が364例、『聖經』が296例であった。以下、表中の主な語彙とそれに関連する語彙について見ていきたい。

1) 承接を表わす副詞

用例数は下表のとおりである。

便	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	0	0	15	1	16
聖經	2	1	13	2	18

就	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	6	2	15	10	33
聖經	4	2	0	3	9

白話で承接を表わす副詞“便”が18例あったが、同じく白話の“就”は9例であった。全体としては、文言的な“則”が305例で8割を占めている。

『神天聖書』に“便”の用例があったものは、『聖經』では以下のようにになっている。

1) L8-24

【神】即來打醒之曰主我等敗耶穌便起叱風與水之洗蕩即息為安靜

【聖】即來醒之曰師師我等敗耶穌便起叱風及水之洗蕩即息為恬靜

2) L7-36

【神】法利西輩中一位請耶穌同食便進法利西之屋置己於席

【聖】法利西輩中之一邀耶穌同食其即進法利西之家坐己於席

3) L9-18

【神】且會耶穌在靜所祈禱與厥門徒便問伊等曰眾言我為何

【聖】且遇耶穌在靜處祈禱厥徒偕之其問伊等曰眾言我為何

『神天聖書』に“就”の用例があったものは、『聖經』では以下のようにになっている。

1) J19-22

【神】彼拉多答曰我曾所寫就寫之

【聖】彼拉多答曰我曾所寫就寫之

3) M9-32

【神】又伊等出去後就有帶懷鬼風之啞#人至耶穌

【聖】又伊等既出隨有攜懷鬼風之啞人就耶穌

3) L12-39

【神】爾自知若東家知何時賊到其就醒守不許打進其屋

【聖】爾自知倘東家知何時賊來其則醒守不容破厥屋而進

4) J9-4

【神】蓋尚為白日我須行違我者之功夜就到無何人能行

【聖】蓋尚為白晝我須行違我者之功夜將至無何人能行也

2) 動詞につく“得”

用例数は下表のとおりである。

得	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	18	10	4	9	41
聖經	18	7	14	5	44

動詞につく助詞“得”のうち、“覺得”は7例、“認得”は10例あったが、“曉得”は用例がなかった。“覺得”、“認得”の用例は以下のとおりである。全体としての用例数はほぼ同じであるが、同じ章節での用例は2)や3)のように一致しないものが多い。

1) Ma5-29

【神】即時其血流之源得乾而身覺得其災得愈矣

【聖】立即其血流之源得乾而身覺得其災得愈矣

2) M17-13

【神】時門徒覺得其言及若翰付洗者也

【聖】時門徒悟其語及若翰付蘸者也

3) Ma10-22

【神】因此言其覺得悶蓋其大有本業

【聖】因此言其覺悵然蓋其有大財業

4) L22-34

【神】曰我告爾彼多羅今日雞#鳴之先爾將稱三次以不認得我

【聖】曰彼多羅我告汝今日雞#鳴之先汝將稱三次以弗認得我

また、“跑得快”の用例は『神天聖書』と『聖經』で全く同じものが1例あった。

5) J20-4

【神】伊兩人皆跑惟那別門徒比彼多羅跑得快而先到墳

【聖】伊兩人皆跑惟那別門徒比彼多羅跑得快而先到墳

2) 助詞の“了”

“了”の用例数は下表のとおりである。

了	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	10	8	8	10	36
聖經	3	3	1	1	8

『神天聖書』では、助詞の“了”は36例あり、26例はマイナスイメージの場合に使われていた。しかし、『聖經』ではかなり減って全体で8例になった。用例自体が少なく、マイナスイメージの場合への偏りもとくに見られなくなった。

(1) 『聖經』になって“了”が使われた例

1) M13-25

【神】但人眠時厥敵來而播惡草入麥中後往去【聖】但人睡時厥仇來而播惡草入麥中後去了

(2) 『神天聖書』と同じもの

1) M12-10

【神】而卻遇一人有厥手衰了故伊等欲告耶穌問之曰是否為合法於撒百#日而醫人也【聖】卻見一人有一隻手衰了伊等問耶穌曰於撒百#日醫人為合例與否

2) Ma12-22

【神】其第七個皆娶之而無遺子也後婦亦死了【聖】其七個皆娶之而無遺子也後婦亦死了

3) L14-20

【神】又別人曰我娶了妻故此不能到【聖】又別者曰我娶了妻是以不能到

(3) 同義の動詞を使っている場合

1) M25-8

【神】且愚蠢者向有智者云以爾之油給我們蓋我燈滅了【聖】且愚者向有智者云以爾之油給我們蓋我燈熄了

2) J5-5

【神】彼有或人已害病了三十有八年【聖】彼有或人患病了三十有八年

では、『神天聖書』で“了”が使われていたもので上記しているのか、幾つかの節を対照してみる。なお、下表には、各章節の表には、各章節が長文の場合は該当部分のみを記している。

書章節	神天聖書	聖經
J11-14	時耶穌明語伊等曰拉撒路 <u>死了</u>	時耶穌明語伊等曰拉撒路 <u>死矣</u>
L5-37	又無人裝新酒在舊皮罐恐新酒裂罐即酒漏而罐 <u>壞了</u>	又無人載新酒於舊皮罐恐新酒裂罐則酒漏而罐亦 <u>壞矣</u>
J18-30	伊等答謂之曰他若 <u>非犯了罪</u> 則不解到汝	伊等答謂之曰若其 <u>無犯罪</u> 則弗解之到爾
J19-30	耶穌接醋後曰已 <u>畢了</u> 即俯首而給靈魂去也	耶穌接醋後曰已 <u>畢矣</u> 即俯首而給靈魂去焉
M22-29	耶穌答謂伊等曰爾 <u>錯了</u> 不知經書與神之能	耶穌答謂伊等曰爾 <u>差矣</u> 不達經旨或神之能
Ma5-26	又因醫生已受多苦並已 <u>費了</u> 本業惟不見愈乃病更深	又因醫生已受多苦並 <u>費盡</u> 所有的惟不見愈乃病越深
Ma14-41	…謂伊等曰爾今可睡而得安事情 <u>完了</u> 時候已到…	…謂伊等曰爾今可睡得安事 <u>畢矣</u> 時候到矣…
L14-18	…第一曰我 <u>買了</u> 田須去看之求爾恕我不到	…其第一者曰我 <u>購得</u> 一■地必須去觀之求恕我不到
Ma8-25	此後其復按手厥目上而使其再舉目而即得愈致見各物 <u>明白了</u>	其後復按手厥目上而使其再舉目即得愈乃見各物 <u>然焉</u>
M16-2	其答謂伊等曰晚時爾等曰將為清天蓋雲 <u>紅了</u>	其答謂伊等曰既暮矣爾云將為清天蓋天 <u>紅矣</u>

3) 助詞“的”

用例数は以下のとおりである。

的	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	48	22	15	25	110
聖經	42	17	8	20	87

助詞の“的”は、上表のとおり『聖經』4福音書全体では87例で、『神天聖書』からはやや減少した。また、“的”の用例は後ろに名詞を持って連体修飾を表わすものだけではなく、後ろに名詞を伴わずに名詞化を表わすものも多い。『神天聖書』で“的”が使われたものをもとに用例を挙げたが、2)、3)のように表現が異なるものでも、ごくわずかな語彙の言い換えのみで、それ以外は1)4)の用例のように、『神天聖書』とほぼ同じである。

1) M13-48

【神】得滿時即拉至岸而坐下拾好的載器乃不好的的棄之

【聖】得滿時即拉到岸而坐下拾好的載器不好的棄之

2) Ma4-5

【神】有的落在石地非多泥而即生起因泥非深也

【聖】有些落在石地無多泥而即生起來因泥非深也

3) L20-24

【神】教我一文氏拿利以看誰的象與字在上伊等答曰西撒耳的

【聖】給一文氏拿利我看誰之像之字在上對曰西撒耳的

4) J5-32

【神】有別的証及我而我知其所証及我之証為真也

【聖】有別的證及我而我知其所證及我之證為真也

4) 接尾辞“子”

子	Matthew	Mark	Luke	John	全体
神天聖書	8	6	9	2	25
聖經	6	3	1	6	16

『聖經』の接尾辞の“子”については、用例は、“孩子”と“銀子”と“(芥)種子”が4例ずつで、“鴿子”、“虫子”、“日子”、“桌子”が1例ずつであった。

M17-18 時耶穌叱其鬼而即出之而那孩子即時得愈焉

M27-5 遂將那數塊銀子擲下堂中而往去自縊

Ma 4-31 乃似芥種子一粒被播地時為在地萬種之至小

L3-22 聖風以形像似鴿子降臨其上又有聲從天來曰爾為我愛子吾極悅於汝也

J12-33 沽爾物及施濟為己備不漸舊之袋在於天不可乏之財彼無賊近無虫子壞

J13-14 …故謂眾曰有六個日子當行工且於是日來而行醫並非於撒百#日

J16-21 想喫富人桌子所落之碎物而犬來舐厥瘡

その他の白話的な語彙については、改めて考察することとする。また白話語彙が使われている場面の描写には、『三国演義』で言われるような、描きたい場面による文言と白話の使い分けがあるのかどうか、については稿を改めて考察したい。

2.6 口語・書面語の特徴となる語彙の対比を通して

これまで考察してきたところと多少重複するところがあるが、ここで文言と白話の特徴となる幾つかの語彙をキーワードとして、同じ意味を表すものを組にして対比し、各々の組で語彙の用例数を比較しておきたい。

1) “甚”と“狠”(或は“很”)について

	Matthew	Mark	Luke	John	全体
甚	4	3	3	1	11

まず“甚”は『聖經』には11例あった。9例が形容詞に前置するものであった。形容詞に後置する文言的な用法は無かった。単独で形容詞「甚だしい」の意で使われるもの1例，“在悲哀之甚(22-44)”1例であった。『神天聖書』では12例すべてが、形容詞、あるいは形容詞的な表現に前置される用法であったから、同じ傾向である。“狠”，“很”は用例が無かった。

“甚”の用例は以下のとおりである。

1) M17-23

【神】且伊等將殺之而第三日其必復生也故門徒甚憂

【聖】且伊等將殺之而第三日其必復活也故門徒甚憂

2) Ma10-23

【神】耶穌環視謂厥門徒曰甚難乎伊等有財者得進神之國矣

【聖】耶穌環視謂厥門徒曰難矣哉伊等有財者得進神之國矣

3) Ma16-4

【神】蓋是石為甚大惟看時見石已滾去

【聖】蓋其石為甚大惟看時見石已滾去

4) L18-23

【神】其聞此甚悶蓋為大富

【聖】其聞此甚愁蓋是巨富

以下、『神天聖書』で“狠”が使われていた節は次のようになっている。

5) M4-8

【神】又氏亞波羅帶之上狠高山示之看世間之諸國與國之榮也

【聖】撒但#復帶其上至高之山示之看世間諸國與諸國之榮

6) L19-21

【神】蓋我怕爾因爾為狠嚴人取所不放下及割所不種

【聖】蓋我懼爾緣爾是貪婪人取所弗放下並割所弗播者

7) L19-22

【神】…爾惡僕依爾口所出我將審爾爾知我為狠嚴人取所不放下割所不種者乎

【聖】…汝惡僕我將依汝口之所出而審汝汝既知我是貪婪人取所弗放下割所弗播者

2) “無” “沒有” について

	Matthew	Mark	Luke	John	全体
無	78	83	78	93	332
沒有	0	0	0	1	1

存在の否定を表わす“無”については、すでに「2. 3」で見たとおり332例であった。用例については「2. 3」を参照されたい。“沒有”は用例が1例あった。

1) J6-46

【神】非以有^レ何人見過父者獨彼由神者即彼見過父也

【聖】沒有何人得見過父惟彼由神者得見過父也

3) “何” “甚麼” について

	Matthew	Mark	Luke	John	全体
何	139	109	121	135	504
甚麼	0	0	0	0	0

疑問を表わす“何”と“甚麼”については、「2. 3」でみたように、“何”は504例で、このうち“如何”が67例、“因何”が26例、“為何”が20例あった。“甚麼”は4福音書に用例が無かった。なお、“何”の例文については、「2. 3」を参照されたい。

4) “彼” と “那” について

	Matthew	Mark	Luke	John	全体
彼	70	35	97	67	269
那	8	2	5	4	19

近称の指示詞“此”と“這”については、「2. 3」ですで見したが、遠称の“彼”は、3人称としての用法、指示詞（場所、ヒト）を全て合わせて269例あったが、“那”は用例が19例であった。“那”の用例については、以下のとおりである。

1) M21-31

【神】此兩個那一個行厥父之意也伊等答之曰其之第一也耶穌謂伊等曰…

【聖】這兩個那一個行厥父之意也伊等答之曰其之第一也耶穌謂伊等曰…

2) Ma3-5

【神】既怒環視伊等因憂伊等之硬心其向那人謂之曰伸出爾手…

【聖】既怒環視伊等因憂伊等之硬心其向那人謂之曰伸出爾手…

3) J18-12

【神】時那群兵丁厥官同如大憲輩俱取耶穌而縛之

【聖】時那群兵與官及如大憲輩取耶穌而縛之

4) J20-3

【神】故彼多羅出去同那別門徒而往向墳

【聖】故彼多羅出去同那別門徒而往向墳

5) 介詞“同”“與”と“合”“和”“跟”について

	Matthew	Mark	Luke	John	全体
同	13	15	11	7	46
與	14	6	9	7	36

“同”と“與”は、動詞と曖昧なところがあるが、介詞と思われる用例は、それぞれ表のとおりで、“同”と“與”のあいだに使い分けは特に見られなかった。白話的な“合”“和”“跟”の3者については用例がなかった。

2.7 その他若干の語彙について

これまでに見た語彙以外で、品詞ごとにどのような特徴があるか見て行きたい。

1) 否定副詞

	Matthew	Mark	Luke	John	全体
不*	154	67	175	122	518
無	78	83	78	93	332
毋	0	0	1	0	1
勿	60	38	57	19	174
弗	45	50	41	114	250
非	57	22	40	95	214
未	26	16	22	31	95
莫	3	1	0	2	6
沒	0	1	0	2	3

否定副詞では、“不”が最も多く518例あるが、これには“不論”の4例、“不拘”の1

例, “不能” の 64 例を含む。このほか, “無 (332 例)”, “弗 (250 例)”, “非 (214 例)”, “勿 (174 例)”, “未 (95 例)” とつづくが, “毋 (1 例)”, “莫 (6 例)” はほとんど使われなくなり, “沒 (3 例)” はまだ用例がかなり少ない。清代から多く用いられた禁止の“別”は『聖經』でも用いられていない。また, 婉曲な禁止「～とはかぎらない」を表す“不必”, “未必”は用例がなかった。中世で多く用いられた“未曾”が 17 例あり, “不曾”は 1 例だけ見られる。

J7-6 且耶穌謂伊曰我時未曾至爾時常備矣

J7-8 爾往此禮宴去我不曾往於此禮宴蓋我時未曾滿至

2) 連詞

不特定をあらわす連詞では, 「清代ではきわめて多く用いられた」“不拘”が 1 例のみ見られた^⑩。かわって, “無拘”が 7 例あらわれた。このほか, “不論”は 4 例で, “無論”は 7 例であった

J14-14 汝不拘何求為我名我即行之

M14-7 故其發誓肯賜之以無拘何求也

M 8-19 或書士來謂之曰主我願隨爾不論何往

M18-20 蓋無論何處有兩三位于吾名而會我即在伊之中

累加をあらわすものでは, 文語にも用いられる“何況”が 3 例あるが, このほかに, “不但”などの用例はない。また, 推論をあらわすものでは“既然”が 2 例見られる。

L11-13 且若爾雖惡知如何給好物與爾子何況爾天之父賜聖風與彼求之者乎

「～と～」を表す連詞については, 第 6 章で他の 3 聖書と比較しているので, そちらを参照されたい。“與”が 195 例, “及”が 201 例で, ほぼ同頻度で使われているが, “連”も 15 例見られ, “連”の呼応で「～も…も」の意味を表すものが 1 例あった。承接をあらわす連詞については用例がなかった。

J16-3 伊將如此而行待爾因伊弗認父連我

J15-24 我若弗行伊中從無別者所行之功伊等則無罪惟今伊睹而恨連我連我父者也

原因・理由を表すものうち, 理由の後に置いて, 「それで～」の意を表すものでは, “是以”, “是故”, “故”, “因此”, “因而”, “所以”が用いられている。

	Matthew	Mark	Luke	John	全体
是以	0	0	1	0	1
是故	0	0	0	1	1
故	57	44	22	44	167
因此	6	1	1	2	10
因而	(1)	0	0	(1)	(2)
所以	0	0	0	4	4
故此	11	1	2	7	21

それぞれ、つぎのような用例がある。

是以 L1-35) 使者答之曰聖風將臨爾上並至上之德遮爾是以得生之聖者將稱神之子也

是故 J5-16) 是故如大輩攻耶穌而要殺之因其行是情于撒百 # 日

故 M5-48) 故爾宜為聖如爾父在天為聖焉

因此 M9-3) 因此或書士輩自內云此人妄稱神也

因而 J13-28) 夫同席無人知其為因而言此於之

所以 J7-39) 其言此及聖神風伊等信之者所將受蓋耶穌尚未升榮光所以聖神風未曾賦

また、以下の用例のように前置詞としての“因為”は幾つか見られるが、接続を表す“因為”は1例も見られなかった。

Ma6-26 王乃悶然因已發誓又因為同席者而弗卻之

2. 8 小結

以上、2. 2から2. 7までの考察を通して、『聖經』の本文も、『神天聖書』と同じく、総じて文言としての特徴を網羅しており、また同時に両者の本文が一部の語彙を除いて、ほぼ同じであり、基本的には文言の特徴を踏襲して翻訳されていることがわかる。譚樹林2000他で言われるように、同一の底本を用いたことだけにその理由を求めても無理がある。というのは、第2章でも触れたように、『四史攸編』は4福音書の抄訳であり、「マルコの福音書」などは全体の18%しか中国語になっておらず、そのみから、ほぼ同じ中国語が訳出されるとは考えにくい。本文を詳細に対照した結果からも、中国本土で翻訳を行ったモリソンから何らかの援助があったと考えるのが、妥当であろう。しかも、『神天聖書』にはあった“他”の関係代名詞的な使い方が改められていたり、やや不自然な表現が幾つもの箇所で見逃されていることも見逃せない。虚詞については、ほとんどが文言虚詞で占められているが、一部の虚詞の使われ方が各福音書で異なり、例えば、“也”や“則”は『神天聖書』と同じく、「ルカの福音書」が文字量からみても明らかに少なく、同一聖書であっても各福音書の間で、異なる言語観によって翻訳された可能性が見て取れる。また、白話語彙については、ヤホントフ1969の白話虚字が『四史攸編』の8例から、『神天聖書』で349例に増え、『聖經』でも296例で、使用されている章節もほぼ一致している。量詞の

“個”或は“箇”と助詞の“的”も、『神天聖書』の110例ずつからは僅かに減ったものの、各々102例、87例あった。一方で、『神天聖書』で36例あった助詞の“了”が、一気に8例に減ったのは大きな変化である。『神天聖書』では、“了”がマイナスイメージをもつ動詞に使われるといった特徴もあったが、マーシュマンは“了”の使用を出来るだけ避けたようである。なお、“個”と“的”の用例など、その他の白話的な語彙による表現については稿を改めて詳しく考察したい。

- ① 譚樹林 2000, 2003, 2004 参照。
- ② The Bible in China, p.53 参照。
- ③ 譚樹林 2000, 2003, 2004 参照。
- ④ いずれもモリソン伝記 *Memoirs of the life and Labours of Robert Morrison* に依った。
- ⑤ 譚樹林 2004 を参照。
- ⑥ ヤホントフ 1969 の虚字は、唐宋時代の文献について、その文体（文言・混淆体・白話（口語））を識別するために文言から白話の虚字 26 語を利用して、鑑定語として定めたものである。
- ⑦ 本節では、The New Greek-English Interlinear New Testament, 1990 のギリシャ語原典対訳の英語訳に依った。
- ⑧ 太田 1964, p19 及び p107 参照。
- ⑨ 太田 1958, p174 参照。
- ⑩ 太田 1958, p176 参照。
- ⑪ 太田 1958 《不拘》の項参照。

参考文献一覧

日本・中国

- 1958 太田辰夫『中国語歴史文法』江南書院
 1964 太田辰夫『古典中国語文法』大安
 1969 雅洪托夫（ロシア：ヤホントフ）「七至十三世紀的漢語書面語和口語」『漢語史論集』（1986 版）
 北京大学出版社
 2000 譚樹林「『聖經』“二馬訳本”関係辨析」『世界宗教研究』2000 年 第 1 期
 2003 譚樹林「近代中文『聖經』翻訳史的“二馬訳本”」『煙台師範学院学報（哲学社会科学版）』第 20 卷 第 4 期
 2004 譚樹林『馬礼遜与中西文化交流』中国美術学院出版社

欧文

- 1839 *Memoirs of the life and Labours of Robert Morrison, Compiled by his Widow, vol. II, Longman, 1839, London*
 1934 M. Broomhall, *The Bible in China*

資料としての聖書

- 1) 『四史攷編』（大英図書館蔵）
- 2) 『神天聖書』 ① ゆまに書房刊 1999 「幕末邦訳聖書集成」 ②（大英図書館蔵）
- 3) 『聖經』（フランス国立図書館蔵）
- 4) 1990 The New Greek-English Interlinear New Testament